# 令和４年度　第１回　信州幼児教育支援センター運営会議

学びの改革支援課

## １．日　　時

令和４年４月 20 日（水）　10:00～12:00

## ２．開催方法

オンライン開催

## ３．参 加 者

【長野県立大学】こども学科長　太田　光洋（信州幼児教育支援センター長）
【長野県保育連盟】会長　海野　暁光
【長野県私立幼稚園・認定こども園協会】理事長　大森　けい子
【長野県野外保育連盟】理事長　内田　幸一
【長野県県民文化部】こども若者局長　野中　祥子
こども・家庭課　課長　柄沢　竜治
企画幹兼課長補佐兼保育係長　小川　貴
自然保育推進員　藤田　良子
次世代サポート課青少年指導主事　西村　智美
私学振興課　主事　吉澤　史浩
【長野県教育委員会】教育次長　尾島　信久
教育政策課　担当係長　中村　光希
特別支援教育課　指導主事　大日向　洋介
学びの改革支援課　課長　曽根原　好彦
義務教育指導係長　臼井　学
指導主事　鈴木　崇晃
指導主事　百田　美希
幼児教育コーディネーター　橋爪　典子

## ４．内　　容

（１）挨拶：尾島教育次長

・幼児教育支援センターは、令和元年度４月に開設され、４年目を迎えた。目的は、園種を越え、「オールながの」の運営体制で、幼児教育の現場を支え、幼児教育の質の向上を図ること。

・本県は、幼保小中高を通じて能動的・主体的な学びへの転換を図る「学びの改革」を進めている。幼児期の育ちが「学びの改革」の原動力となることから、当センターの役割は極めて重要。

・昨年度は、WITH コロナの時代の研修として、オンラインでフィールド研修を実施した。今年度はさらに、オンラインと現地研修を組み合わせた新しい研修のあり方についても、研究を進めていく。また、これまでに作成した、園・小接続カリキュラム【理論編】と【実践編】や、保育者育成指標をもとに、幼保小接続カリキュラムの編成や保育者研修体系の整備を一層進めていく。

（２）協議

①　令和４年度信州幼児教育支援センター事業内容について

【鈴木指導主事】

・これまでの教師主導から子供中心の学びの改革へ

・本事業の目的「県内の全ての子ども達に質の高い幼児教育を」

・運営体制「オールながの」年に６回専門部会を設け、具体的に進めていく。

・今年度は三つの取組を中心に事業を進めていきたい。

・一つめ。信州幼児教育フィールド研修。

・「遊びを中心とした保育」への理解を深めるため、幼児教育の重要性を発信していく。

・今年度もオンラインで開催予定。実践園の保育の様子を録画して配信する。視察研修もうまく組み合わせながら、小学校の先生の参加も促しながら進めていく。

・県内４園に加え、園小接続会場として１校選び研究を進める。

・二つめ。研修体系について。「育成指標 1.1」を、「育成指標 1.2」に更新し、運用。

・育成ステージに基づいたキャリアステージごとに、様々な研修を計画。また、研修の研修動画の充実を図っていく。

・三つめ。幼保小接続カリキュラムについて。

・昨年度までに、「接続カリキュラムの開発」の冊子を作成。

・子供の学びや発達をつなぐ「接続」へと転換していくために、全ての市町村の学校、園に配布。これをテキストにして、園、小学校の先生の合同の研修を行う。また、フィールド研修の園小接続の実践校においても研究を進めていく。

【太田センター長】

・いろいろなことが具体的になってきている。ご意見やご感想をいただきたい。

【海野会長】

・フィールド研修について。コロナ禍でなかなか集まることができない。実施園に一人ずつ程度入っていただくなど、全員一度に集まるのではなく、一日一人ずつ参加、体験するような形は可能か。

【太田センター長】

・新型コロナウィルス感染症の状況や感染対策などもあるが、できるだけ現場が見られるように考えていきたい。

【野中局長】

・意識の高い方は研修に積極的に参加するが、広く浸透できているのか、現状はどうなのか。特定の人だけでなく、広く普及させるためにどうしていくのか。

【太田センター長】

・各園で園内研修ができるよう動画を作っている。オンラインでの研修参加が増えてきている。

【鈴木指導主事】

・本日配布した資料「参考資料」の中のフィールド研修で例を示す。

・昨年度５園で実施、第１回、第２回の参加者は 579 名。延べ人数だが 600 名弱参加。内訳を見ると、市町村ごとの参加人数にばらつきがあり、77 市町村あるうち、37 市町村から参加いただいているが、小さい市町村、特に南信地区からの参加率が低い。山間部の小さな園が多く、園のオンライン環境が整っておらず、参加できないという声もあり、市町村役場に行って参加する園もある。役場への距離もあり、参加しにくい。ICT の整備の必要性を感じている。

【太田センター長】

・ICT 環境が課題。学校での環境は整ってきているので、今後も進むとよい。

【曽根原課長】

・幼保小の接続カリキュラムについて。幼保で広がっても、小学校で広がっていかないと意味がない。小学校をどうするかというのは、まさしく教育委員会の仕事。試しに何校かの小学校の校長先生、教頭先生に、「探究的な遊びを中心とし、やりたいことを突き詰めてきた幼児たちが、小学校に入り管理的なものに縛られ、よさが消されたり学びにくさを感じたりするようになる」という話があるが、実態はどうかと聞いた。管理職の中には理解が進んでいる人もいるが、「子供をしっかり管理することは大切なので、指導を進めたい」という声も。根本的に校長先生方にも理解していただく必要がある。５月の全県の校長先生が集まる校長会で取り上げて、まず一石投じたい。そういう取組と幼児教育支援センターの取組とをサンドイッチ形式で進めていければと考えている。

【太田センター長】

・小学校との接続は、管理職の理解がないとなかなか具体的に進まない。機会があるごとに働きかけていただきたい。「理論編」「実践編」の冊子ができてきて、今年度それに関する研修を行う。具体的な接続の活動のアイデアを出し合うような研修を考えている。保育や教育の実践レベルで具体的に考えられるようにしていきたい。

【大森会長】

・目的の中に小学校への「適応」から発達や学びをつなぐ「接続」への転換ということがあるが、理解してもらうのが難しい。特に今回インクルーシブとの連携がある中で、先日、信大の本田先生のお話を聞き、クラスでみんなが同じことをすることを、いか

に崩していくかということが課題という話があった。保育園、幼稚園もまだまだ行事中心の園が多く、保護者も自分たちが経験してきたような行事を経験させたいという思いがある。その辺のあり方をどう崩していくか、協会としても話をしている。

【太田センター長】

・一斉保育、一律に学ぶところからなかなか脱却できない。成果主義、親はそれを歓迎する風潮がある。コロナ禍で、行事等がなく保護者にとっては物足りない現状の中、普段の遊びの中でどんなことが育っているかを示していけるようなプロセスをどう伝えていくか、親に対する働きかけ、理解を並行して進めていく必要がある。現場としては切実な課題ではないか。ドキュメンテーションなど、プロセスを伝えていくことも研修の中に加えていきたい。

【内田理事長】

・接続カリキュラムに課題を感じている。小学校に入学した子たちが、そろそろ嫌になってくる時期。野外保育で育った子たちにとっては学校の生活のリズムが合わない。保護者にとっても学校のリズムに合わせていけるのか不安。遊びを中心にして成長していく、発達していくという意識のつながりはまだまだ課題が多い。小学校低学年期の授業形態、生活の作り方を積極的に考えていかないと、接続の問題はうまくいかない。１年、２年の授業の編成の仕方などにも課題ある。こちらからも提案していきたい。

【太田センター長】

・野外保育など、それぞれの園の独自の取組も視野に入れながら、長野県独自の、個性的な方法を公立の学校、保育に広げ、刺激を与えていけたらよい。

【海野会長】

・校長、園長のマネジメントの必要性を感じる。意識改革を進めてほしい。保護者の意識改革、方向性を知っていただく必要もある。流れを変えるのは大変。みんなでもがいていくこと、うまくやっていけたらよい。

・昨年１月 26 日中教審で出された「令和の日本型学校教育」について、保護者懇談会で資料を配布し、「個別最適な学び」「協働的な学び」など、今学校はこういう流れである、ということを保護者に伝えた。幼稚園のうちから、保護者にこのような情報を提供していく、全体としてもがいていく、意識改革を進めることが必要。

【太田センター長】

・園の方でも啓発をしていただけたらありがたい。

②　令和４年度の運営方針及び事業内容について

【鈴木指導主事】

・専門部会について。昨年度からの変更点：専門部会の一本化。
幼保接続、研修の二つに特化してきたが、それ以外の事業についても御意見をいただ

き、研修や接続以外のことも含め、専門部会で検討していく。

・フィールド研修について。実践園（４園）、実践校（１校）を決定。計画に基づき、研修を進めていく。

・昨年の参加者の皆さんのアンケートを行った。「フィールド研修は幼児教育の質の向上に有効か」という質問、その他の質問についても肯定的な意見多数。

・令和元年度、コロナ禍前には、実際に集まっての研修であった。昨年はコロナ禍ではあるが、オンライン等利用し、意義のある研修ができた。第１回から第２回にかけて、肯定的なポイントが上がった。研修を繰り返すことでよさを実感していることが分かる。一方、オンラインでの研修については肯定的なポイントが若干低くなった。現場のニーズとしては、実際の保育を見てみたかったという意見があった。

・アンケートでどのようなことを学べたか聞いた。テキストマイニングでの分析では「こどもたち」「主体」「大切さ」「わかりやすく伝える」などに関わる感想をいただいた。また、それぞれの言葉のつながりを見ると「職員間の連携」「子ども主体の保育を大切にしていく」「ふりかえりの大切さ」「ドキュメンテーションをつくる取組」などが大事と感じていただいた。

・フィールド研修のちらしを今後配布していく。

・実際の保育を見られる場の提供。１期、２期であるこれまでの実践園・校に、視察研修ができる。少人数であれば、受け入れ可能。すでにチラシを配布しているので、各地区の会場に足を運び、実際の保育を見ていただくという形で進めていく。

・研修体系の構築について

・育成指標に基づき、より現場の皆様に御理解いただけるよう、保育者としての姿、３つのポイントを示す。昨年度専門部会で３つのポイントをより分かりやすく示せるよう、それに関連する動画を作製した。育成指標の文字の部分をクリックしていただくと、動画が流れるようになっている。園内研修の充実を図っていただけるよう、育成指標とポイント（解説）がリンクしたものになっているので、見ていただけるよう現場に伝えていく。

・育成指標の横軸、キャリアステージごとに示された、必要になってくる保育者としての資質を育成していくための研修を設定した。五つのステージで研修を行う。園小接続について、園、小学校全ての先生方が一緒に接続について学び合う、また奈須先生には資質・能力の点から講演を行っていただく。チラシの配布などにより多くの方に参加いただけるよう案内する。

・園小接続カリキュラムの編成・充実について。【実践編】をテキストに研修を進める。市町村保育担当、教育委員会（行政）を対象として園小接続会議を行っていく。幼保小接続担当アドバイザー（学びの改革支援課）を配置する。活用いただきたい。

【太田センター長】

・三つに柱に焦点を充てて説明していただいた。ご意見、ご質問はあるか。

【海野会長】

・南信地区、フィールド研修は伊那市が３年続く。他の市町村から応募はないのか。

【鈴木指導主事】

・声がけはしているが、なかなか応募していただけない。日常の保育について、一緒に考えていくというスタンスでやっていきたいと考えているので、今後も引き続き声がけしていきたい。

【太田センター長】

・今までの実践園に拠点になっていただきたいという計画で進めた。身近なところで見学できる。見に行っていただきたい。

・地域ごとに養成校の先生が関わっていくよう模索していきたい。

【野中局長】

・受講者アンケート高評価だが、逆によくない評価の人、何の部分について、どうしてそう思ったのかが改善のヒントであると考える。そこを深掘りし、本年度の事業に生かしている点はあるか。

【鈴木指導主事】

・具体的には、昨年度のインクルーシブ会場で、具体的に支援が必要なお子さんにどう支援したらいいのか、取り出して個別の対応どうしたらいいのか見たいという先生方がいらした。しかし、提案されたインクルーシブ保育が、自分達の求めていたものとは違うという評価があった。来られた先生方と、実践校でのインクルーシブに対する考え方のずれがあったか。今後インクルーシブの理解をより深めていく必要があると考えている。

・オンラインで回線が途切れ、聞くことができなかったという声も。受け取る側の回線の問題。

【野中局長】

・研修の目的、ベースを理解していただいた上での研修に。募集や開催の最初に「インクルーシブとはこういうものだと考えている」という考えの共有をする必要がある。

【大森会長】

・市町村の幼児教育担当課と教育委員会を対象とした園小接続会議を実施しているということだが、小諸市では、月一で部会を開き保育園の先生と会う機会がある。年度が替わると担当が変わり、これまでのことが全く分からなくなってしまうということがある。引継ぎはどのようになっているのか。

【鈴木指導主事】

・行政は部署異動によって全く専門外の方が担当になることがある。

・須坂市、伊那市など進んでいる市町村の方から、行政としてどんな取組をしているか実践発表していただいたりして、行政として園にどう関わっていくか、どんな会議を開いていくか学んでいただく。私たちはそのパイプ役となり、場を作っていく。

・教育委員会と、幼児教育の主幹課、担当課など、両方の部署から同じ会議に参加してもらう、そんな流れが広がっていくといい。

【太田センター長】

・行政の担当課の中での引継ぎが課題。それぞれの課での引継ぎについても会議の中で触れていっていただけるとよい。

【鈴木指導主事】

・訪問支援体制の充実のため、幼児教育アドバイザー連絡協議会を本年度立ち上げる。県や市町村それぞれのアドバイザーが「オールながの」ということで、情報共有、長野県としてどんな幼児教育を進めていくか、情報交換の場を年２回設ける。

・園種を越えた訪問支援の拡充。幼児教育アドバイザーの訪問支援を行う。すでにチラシを配布しているが、思った以上に現場からの反響がある。電話での問い合わせが多数来ている。幼児教育アドバイザー、現場のニーズがある。

・ドキュメンテーションの普及・活用を進めている。

・保育の見える化…写真・簡単なコメントをつけたドキュメンテーション

・フィールド研修に参加いただく園に課題としてドキュメンテーションを作っていただき、研修の成果物として発表していただく。事例集として発信していきたい。

・昨年１年取り組んできた結果、県内でドキュメンテーションを作成する園が増えた。

・学ぶ、取り組む、広げる
子供をよく見ようとする保育者としての目を育て、保護者の方にも保育を知っていただく。

・ドキュメンテーションを通して、小学校、園の先生が語り合う機会。対話を生み出すツールとしても有効に働いている。今後も各研修とリンクさせながら普及を進めていく。

・長野県総合教育センターとの連携について

・公立の幼稚園、認定こども園対象のスタート研修の間口を広げ、午後の部に私立の幼稚園や保育所等の先生方に参加いただいた。公立の必修 15 名に対し、私立、保育所の先生方 36 名参加。

・「幼児教育　基本」という幼児教育専門の講座ができ、教諭だけでなく、保育士の方、認定こども園の先生方も参加できるようになった。（保育士等の皆さんは資料代等 1000 円で参加可能）

・情報の発信、HP の充実や研修動画のオンデマンド配信

・家庭向けの情報誌の発行

・こどもの育ちを支える仕組み作り

【太田センター長】

・新しい取組もある。ご意見、ご感想を。

【海野会長】

・幼児教育アドバイザーの訪問について、保育を変えるために、専門のところにお願いしてきた。非常にお金がかかった。お金をかけず、保育を変えることができる。
・今、ドキュメンテーションから動画配信になってきている。そんな流れも知ってもらいたい。
・発表会までの過程を動画で配信。保護者の方が過程を知っていることで、行事が盛り上がる。
・ドキュメンテーションを作ることで、保育園の記録となる。（監査等にも関わって）

【太田センター長】
・ドキュメンテーションを作ることによって、保育者が振り返る、園、小学校の先生が内容を理解する、保護者の理解、子供が自分たちの経験を振り返る…それによって子供の中にとどめていくことができる。
・アドバイザーが保護者向けに話をするというのもよい。

【内田理事長】
・アドバイザーが保護者向けに話をするのはとてもよい。客観的な視点で外部の人間が話すと保護者への響き方が違う。客観的なアドバイスをもらいたいという思いが常にある。大事な事業。
・派遣できるスタッフを増やすなど、体制づくりを並行してやっていくとよいのではないか。

【鈴木指導主事】
・今後のアドバイザー事業について、今年実績を作り、アドバイザーを増やしていきたい。北信、中信など地区ごとにサテライトのような形で配置し、要請が来た時に派遣していくようなことを進めたい。国もそのような形をイメージしているので、どうやって人材を増やすか、どこからお金を出すか、アドバイザーを育てるためのシステムなど考えていきたい。

【太田センター長】
・保護者への話も、訪問した園でそういうこともできるということを伝え、少しずつやっていくのもいいか。

【鈴木指導主事】
・今年はチラシから外したが、今後アドバイザーが増えてきたら、そういった対応も可能か。

③　質の向上に係る幼児教育関係課の取組について

【学びの改革支援課】
・公立幼稚園、公立認定こども園の新規採用教員の園外研修について、学びの改革支援課と、こども・家庭課で進める。保育士の皆さんも参加できるよう、各市町村にお伝えしている。

・幼児教育理解・発展推進事業（長野県協議会）
・文科省のテーマに則して、話し合う場の設定

【私学振興課】
・私立幼稚園園児一人当たりの補助額について
・私立幼稚園処遇改善支援事業補助金について
・教育支援体制整備事業補助金
・研修・派遣事業について

【こども・家庭課】
・保育士等の資質向上事業
・キャリアアップ研修　キャリアステージ研修と連携して行う
・自然保育に係る研修について（自然保育研修会・自然保育専門研修）

【特別支援教育課】
・特別支援教育推進員の配置について
・発達障がい支援力アップ　出前研修について
・就学相談について

【太田センター長】
・特別支援　個別の子への対応についての相談今後多くなると考える。
・今個別の相談がどのくらいあるのか。
【特別支援教育課】
・把握できていないので、調べてお伝えする。
【曽根原課長】
・「就学までのプロセスとそのポイント」この配布対象はどの範囲で、どこで使えるものかというイメージか。
【特別支援教育課】
・就学相談の担当者に向けて配布している。
→全県の就学相談の方が、これをみんな持っているということでいいか。
→確認してお答えする。
【大森会長】
・小諸市の園長会議で、ちょうどこの資料が配られ、障がい児の就学相談に活用してほしいと言われた。小諸市から委員になってほしいということで、相談受ける立場を引き受けることになった。
【海野会長】

・小学校に入学する際に接続については保護者も気になる。この仕組みの中でうまく合わせてやっていってくださいという作りになっているように感じる。学校側がお子さんに合わせて柔軟に変わっていくということ、合理的配慮をしていくというような文言を入れていただくなど、色々な取組や方向性が見えるようにしていただきたい。

【内田理事長】

・就学までのプロセスの全体像が、園側から見えない。どういうプロセスをたどって就学につながるのかが、これまで見えてこなかった。この図があれば、イメージしやすかった。行政の担当者だけでなく、各園に配布されていると具体的な対応をしていけるのではないか。

【太田センター長】

・各園に届くような工夫をしていただきたい。

・４歳児くらいからどのようにしていくか見通しをもってやっていく。これが園にあると見通しがもてる。

【内田理事長】

・保護者の希望、教育委員会とのすり合わせに時間がかかる。２年くらいのスパンで考えていけるよう、資料があるとありがたい。

【鈴木指導主事】

・前会長、宮川先生に御参加いただいていた。宮川先生から一言お願いしたい。

【宮川前会長】

・支援センター準備段階から参加。幼児教育に携わり 40 年近く。今心配していることは、人材の確保、教員養成についての問題。

・支援センターの目的の「質の向上」「幼児教育の質の向上に関する業務」に関わってくるが、人材の確保が難しくなっている現状。採用試験が定員に達しない年も。養成校を出ても、幼稚園等に就職しない状況の中、「人づくり」をどうしていったらよいか、今後、そんな点を考慮して方向付けしていっていただきたい。

・幼稚園「おさなご」、保育園「すこやか」という情報誌を、支援センターを通し、県下に配布し、家庭教育を含め、支援をしてきた。予算を増やしていただいているということなので、今後も家庭の子育て支援の一翼を担うような活動をしていただきたい。